

新晃工業

# リニューアル需要確実に 工場系案件、増加の兆し

空調機器の総合メーカー、新晃工業（社長＝武田昇三氏、本社・大阪市北区）の前3月期決算（平成29年4月1日～平成30年3月31日＝連結業績）は、空調機の全国出荷台数が増加に転じているなど、

堅調な事業環境で推移した」とし、国内、海外合わせたグループ売上高は404億1千600万円（前連結会計年度比4・8%増）、営業利益は54億8千万円（同0・4%減）となった。

セントラル空調の需要の多くを占めるリニューアル案件は多く、これまでに数多くの納入実績を持つ新晃工業の市中ストックは豊富。バブル期の新築建物が軒並み更新時期に入っていることに加え、

関西ではホテル、複合商業施設、総合病院、工場系など新築案件も進んでいる。大阪・梅田のうめきた2期や域内各地域の公共系など今後、新晃工業の出番が予想される案件が控えているが、「メインはリニューアル」（営業開発部長・稲川健氏）とし、期待できそうな大型案件もある。それらを注視しながら、足元の案件を取りこぼしな

くまとめていきたい」（同）と全方位の提案営業を展開する構え。

業務用空調システムの中で大規模オフィスビル、大型複合商業施設、工場といった大型構造物に適用されるセントラル空調方式では、熱源機を集中設置して建物内に冷温水を循環させ、二次側空調機で室内の空調を行う。個別空調方式の適用拡大という事情があるが、新築物件においては省エネ制御が容易に図れるセントラル空調方式の採用事例も高まる、との指摘も見られる。リニューアル時の工事負担が避けられるなど全体としてコスト面での優位性があり、熱源や二次側・補器類などユニット単位でのパッケージアップも図りやすいといった点もセントラル空調方式の大きな特徴。

新晃工業は、セントラル空調方式向けにエアハンドリングユニット、ファンコイルユニットをはじめとする二次側空調機器を幅広くラインアップする。同社では今後、工場の新・増築に伴う空調設備需要は高まると見ており、リブレース／リニューアル需要と相まって下期の市況は強含みとする。同社としても対象案件の開拓・提案営業にさらに注力する方針。